

〔書評〕

## 中西健治著 『浜松中納言物語全注釈 上・下』

八島由香

中西健治著『浜松中納言物語全注釈 上・下』は、宮下清計校注『新註国文学叢書 浜松中納言物語』（大日本雄弁会講談社 一九五一）、松尾聰校注『日本古典文学大系 浜松中納言物語』（岩波書店 一九六四）、久下晴康編『浜松中納言物語』（桜楓社 一九八八）、池田利夫編『新編日本古典文学全集 浜松中納言物語』（小学館 二〇〇二）に続く（以下、それぞれ『新註』『大系』『久下』『全集』）、『浜松中納言物語』（以下『浜松』）五冊目の注釈書である。また、訳が付けられた注釈書としては、『全集』に続く二冊目である。この、目の目を見ることになかった『浜松』という物語の注釈書が、このところ立て続けに二冊も刊行されたということは、なんともうれしい限りである。

特に著者は、処女論文「九百九十九人の王」の典拠について「〔解釈〕一九七〇・三、『浜松中納言物語の研究』所収」で、それまで「故事があるが未詳」（『大系』頭注）「中国の故事または経文に見える話であろうか。出典不詳」（『大系』補注）などと解釈ができないとされていた語句の出典をつまびらかにした人物でもある。以降『浜松中納言物語の研究』（大学堂書店 一九八三）、以下『研究』、『平安末期物語攷』（勉誠社 一九九七）、以下『攷』の出版を経た著者の手による『浜松』の注釈書である本書は、大いに待ち望まれたものであった。

本書出版から三十五年もさかのぼる一九七〇年の論文の語を持ち出したのは、著者の論文を紹介し、本書に寄せる熱い思いを言い表すためだけではない。『新註』『大系』という二冊もの注釈書が刊行されてもお、「未詳」「不詳」「わからない」などという言葉をいくつも注釈に付けざるをえない、『浜松』という物語の不幸にして幸いな注釈状況・研究状況が見て取れまいか。それまで「未詳」とされてきた「九百九十九人の王」の数に入りて返りきたりけん人のまことによりも、夢のうちの夢よりも、げにいかなる涙か流れ出でん」（『浜松』巻一）という一文は、著者によりその出典が明らかにされ、一つの「読み」が提示された。しかし『浜松』の物語全体を考えた際、その偉業も注釈の「未詳」「不詳」の一つを書き換えたにすぎないと言わざるをえない。

『浜松』が日の目を見なかった不幸な物語なのは、早い時期から首巻の散逸があり、加えて巻五が一六〇〇年前後に失われたことが理由の一つとしてあげられよう。(巻五の発見は一九三〇年。それまで首巻を欠く、巻一から巻四までしか存在しなかったのである。)『浜松』に古注がないのは、『無名草子』の『寢覚』『狭衣』ばかり世の覚えはなかれど』ではじまる『浜松』に対する評価を考えても、面白くないからとか『源氏物語』に比べて文章や構成において劣っているから、という理由ではない。とにかく「不幸」の一言に尽きよう。そのため、『浜松』には古注釈による研究の蓄積がないという状況の中、いちから注釈がつけられることになった。『浜松』に積極的な注釈をした『新註』『大系』二冊の(しかない)注釈書では、(あの詳細かつ丁寧な〈読み〉の可能性を提示している『大系』補注をもつても)「未詳」「不詳」「わからない」という部分を、いくつも抱え込まざるを得なかったのは、それゆえである。「九百九十九人の王」に対する著者の画期的な〈読み〉の提示がなされたのは、このような状況の中であった。

その後、ほぼ『大系』を一つの手がかりとし、莫大な先行研究の蓄積を持つ『源氏物語』の研究手法や解釈の手段に学びながら(その点、皮肉にも『浜松』という物語の生成と類似する)、半ば手探りのような状況で、作品を解釈するという〈読み〉の提示は、数少ない論文や『新註』『大系』の後を追う注釈書によって行われていった。全注ではないため先ほど注釈書として数えなかった『平安後期物語選』(和泉書院 一九八三、以下『物語選』)の三角洋一による一部の注釈、テキスト版で注が少ないのが残念だが積極的に新たな解釈を加ようとする『久下』。そして一般書として入手しやすい『全集』が刊行されるに至って、『浜松』の本文はある程度整い、注釈書として初めての訳も付いた。その上、論文目録も充実したという点において、『全集』が注釈書として果たす役割は大きいであろう。このように『浜松』の注釈状況が向上し、ようやくいくつかの注釈<sup>11</sup>いくつかの〈読み〉の提示をもとに、作品を読む環境が整いつつある中、待望の本書が刊行されたわけである。本書を上下巻に分けざるを得なかった、一三八七頁という膨大な注釈は、著者の『浜松』という物語に対する熱い(厚い)情熱もさることながら、『浜松』が不幸な物語であるが故の、〈読み〉の提示の少なさに依拠してもいよう。

以下、本書をようやくのことで一読した際に気が付いた特色を雑多に述べさせていただく。はじめに【注釈】【口語訳】【補説】【評】のそれぞれについて。まず【注釈】は、『大系』の補注などをひろいあげ、難解な箇所を明らかにしようとして試みている。先行研究の説を比較検討しながらも、特に「久下」や、『物語選』の三角洋一を積極的に取り入れている。注釈の形は、おおつぱらに新しい〈読み〉を提示するというわけではなく、これまでの注釈書の整理、解釈の分類、その中から適切なものに対して後押しするという形で一つの〈読み〉の提示がなされていることが多い。この後押しという〈読み〉における行為は、「穏当である」とい

消極的な姿勢に捉えられてしまっても仕方のない行為ではあるが、先行研究を重んじ、用例調査による一説の後押しは、むしろ積極的なものであろう。

【口語訳】における〈読み〉に関して。【注釈】から窺える著者の誠実な姿勢は、【口語訳】にも反映されているため、【注釈】とのズレが少なからず生じてしまう結果となっている。つまり、【口語訳】がこれまで通りの説をとり、無難に〈読み〉が提示されつつも、【注釈】には慎ましやかに新しい〈読み〉の提示がなされる。もしくは【注釈】ではその訳に首を傾げ、疑問点を書き連ねているという状況が多々ある。これは、この【注釈】に従って訳をつけたらどうなのかと、それを考えさせる仕組まれた行為なのであろうか。本文の〈読み〉に一義的な〈答え〉はないと。本書を手にする者の、自身の〈読み〉を煽るかのような、著者の飽くなき探求心が感じられる。

【補説】における〈読み〉に関して。個人的には、本書の補説一覧を作りつつ一読したが、補説索引（二三四五・二三四六頁）を見れば、全体の半分以上が「……」について」という題が付けられた、語句の解釈に対する補説であることがわかる。【注釈】同様、【浜松】の用例の調査だけではなく、同時代の後期物語における使用状況などを綿密に調査した結果、補われた〈読み〉である（例えば一一六一頁、一二五〇頁の補説はその傾向が顕著である）。中には【浜松】の演習の中から生じた学部生や院生の〈読み〉を上げている部分もある。個々の〈読み〉を大切にしようとする著者の人となり窺えるとともに、「中納言と吉野姫君との贈答歌について」（九八〇頁）のように、間違いをある一定方向へと導いていこうとする、著書の優しくも厳しい研究に対する姿勢を窺えるものもある。具体的にあげると、「衛門の督の御文」について（二六九六頁）では、その文の書き手を誰とするかによって、物語の〈読み〉が大きく変化するということがわかりやすく説明されている。一方、「煙の中の月」について（九〇六頁）で「尼君の死後、遺体は……（略）……峰の上の然るべき場所に埋葬したと解釈される」と示された部分は、大方の注釈書が「煙」という言葉の形成する一つのイメージ（＝遺体を焼く火↓そこから出る煙↓火葬）からこの歌を解釈したが、それは明らかに誤読であったと指摘するものである。また、「淵に」身を投げたの関わりという指摘が目新しい。おそらく【浜松】における「いなぶち物語」引用の指摘は初めてではないか。他にも、「天の岩屋」について（一〇三三頁、一〇三三頁）では、「大系」説を支持しつつも「不利な点もある」と述べ、「いまは一応は……（略）……と考えておきたい」と考察を加えている。なぜ、その〈読み〉は指示されないのかという点を、他の注釈書による〈読み〉と比較し、追求する著者の姿が強く表われている。個人的に「思ひあはず」について（二二〇頁）並びに「夢を思ひあはず」とについて（二二八頁、二二八二頁）、「仏教語について」（六二六頁）は、必要不可欠な項目だと考える。

最後に【評】に関して。補説同様に評一覧を作成し読み進めた所、一区分ごとに【評】がついているわけではないため、まばらな感を受けるものの、内容は補説同様に充実したものである。「作者の巧みな意図」(四九九頁)を探るといふ、物語構想や物語構成に目を向けつつ、物語場面の〈読み〉を豊かにしていくようなものでもある。巻二「八」の補説(三五〇頁)に「中納言の悔恨について」という題がついているのは、【評】が【補説】同様に力が入られて書かれていることを表しているようか。ちなみに、この【評】は著者の「攷」の第一章一の「浜松中納言物語巻一の冒頭文」で示された論旨が生きたものである。

続けて、言い切れなかった三点。まず一点として、用例の上げ方である。『浜松』でその語句がどれだけ使われているのか用例数を上げ、時によっては使用されている対象などを上げる。『源氏』の用例数も当然挙げられているものの、問題にされている語句の使用状況が、特に『狭衣』『寝覚』といった後期物語における用例数によって示されているのは目新しい(本書上巻では、後期物語の用例が先、『源氏』の用例が後に上げられている箇所もある)。「源氏」があつて、そして後期物語があるという図式は否めないながらも、敢えて言おう。「源氏」との比較だけで『浜松』を読むのは、あまりにも「源氏」という偉大な物語にとらわれすぎてはいないか、と。はやきともとれる、後期物語研究者・愛好者が一度は感じる(であろう、感じてほしい)考えを抱かせない注釈(むろん、意図的に『源氏』にとらわれすぎている注釈書も

便利)である。用例ではなく「用例数」の列挙は一見不親切のようには思われるが、ようはあとと自分での用例にあたりなさいと、優しく諭されているのである(実際、誘惑され用例に当たった)。まさに、自らの〈読み〉を促す注釈書となつていよう。

二つ目として、中村真一郎の口語訳に触れている箇所があるという点。この姿勢は「攷」の第二章における、中村真一郎、円地文子、津島祐子の小説構成と「夜の寝覚」とを比較検討した姿勢から窺えるものである。具体的には、本書、巻一「四」の【評】では中村真一郎の戯曲を引くことによつて、物語の〈読み〉を手助けしようと筆をさしている(一三三頁)。巻二「三二」の【補説】「共通の欠字について」では、「こういう場合、中村真一郎氏の作家としての口語訳(『王朝物語集Ⅱ』一九六頁)は参考になる」とする部分(一八五頁)。そして、【注釈】では、巻二「二二」「中村真一郎氏の口語訳には「うらめしさ」と「いふかひなき御名」とを並列と見て：(略)……とある(四三三頁)、巻三「二八」「中村真一郎は「中国女性の積極性は：(略)……」(『王朝小説』新潮文庫・二三五頁)と述べている(七四五・七四六頁)というように、【注釈】【評】【補説】の全項目にわたつて取り入れられている様子が見られる。訳も注釈という〈読み〉の提示であると考え、先行する研究によつて示された一つの〈読み〉に対し、謙虚なおかつ誠実な著者の姿勢が見て取れる。

三つ目として、図式・箇条書きによる整理がなされている点。後期物語の特色である、長い独白・独白めいた会話文・膨大なお

かつ複雑な心中思惟が、これまでの注釈書にはない図式や箇条書きによって整理されている。その図式は『注釈』だけではなく『補注』『評』にも使われ、登場人物の心情を整理することによって、物語展開にわかりやすい解釈を加えている。

では次に、具体的に問題点や疑問を提示することで、『浜松』が不幸にして幸いな注釈・研究状況にあることを述べてみたい。

まず、本書の系図（一三六二頁）に関して触れることから始めよう。当然、系図も（読み）の提示の一つである。本書の系図は、著者の『研究』の系図を引き継ぎ、いわゆる端役と言われてしまような、吉野尼君の乳母一族や唐帝の二人の後・女御たち、古宮など、物語内人物をある程度まで取り入れた詳しい系図である。

『研究』における系図との違いは、左大将家の男君、中納言母の母（中納言祖母）にあたる大上が系図に書き加えられ、式部卿宮の母が「女」という表記から「中宮」へとかえられたことか。左大将家の男君は、巻二「二〇」「中納言、帰宅する。大将の心中を思いやり、中納言は複雑な心境になる」（四一四頁）に「御をちたち、大将殿、御子ども」と書かれるという点から本文中、明らかにその存在が窺える。一方、「大上」の存在は、『新註』『大系』『物語選』『久下』『新全』の系図には記されていない。著者も関わりを持った『平安末期物語人物事典』（和泉書店 一九八四）にはその名が記されているものの、説明は付けられていない。そもそもこの「大上」の存在は、石川徹の『浜松中納言物語精考』（『国語と国文学』一九八三年二月号、『王朝小説論』再

録）に述べられたものである。その説を取り入れ、翌年に刊行されたのが『平安末期物語人物事典』であろう。しかし、その後に出版された注釈書の類は、この人物を系図並びに本文に取り入れることはなかった。本書の該当部分、巻五「五」「中納言、こっそり大式女に会い、言葉を尽くして慰める」（一一二六頁）の一行目、「中納言大将の大殿とまり給ひ」の本文は、「大上の大将殿」が校訂された本文である。どの注釈書もこの部分は校訂することで本文を立て、中納言が「大将の大殿」（中納言の母方の祖父ということになっている）の邸に泊り、その邸に住まう大式女にこっそりと対面する場面と読み取っている。著者は登場するのはこの場面だけであった「大上」を、校訂という（読み）を行うことで、物語内に登場しない人物として処理したのである。校訂を加えることによって本文を整え、そのような（読み）を提示する本書が、それと連動するはずの系図に「大上」という人物を記すのはいかがなものだろうか。先行研究を重んじた結果、生じたゆえの記載であろうか。

これと関わって、系図でその「大上」の夫にあたり、中納言母の父である「大将の大殿」についても述べておく。本書の巻三「二六」「中納言、大式女の許に忍び込む」（六五六頁）では、本文一四行目「大上の大殿、風おこり給（ひ）て悩みたまへば、大将、殿の上、みなわたり給へるに」という本文が立てられている。注釈で「大上の大殿」は「大将の大殿」のことであると断りつつ、著書は『新註』など諸本「大将殿の上（うへ）」とする。

「久下」は「大将・殿の上」との見方を示している。いまはこの説を採る。「大将」「殿の上」とは、左大将と中納言の母をさし、中納言の母にとつて「大将のおほいと」は父、大将にとつては義父にあたる」と「大将、殿の上」の注を付ける。この「大将殿の上」という本文に読点を入れるか入れないかで、中納言の母一人をさすか、大将と中納言の母の二人を指すかという〈読み〉の変化が生じるのである。これは一見したいことがないようでありながら、大きな〈読み〉の変化を導くものである。読点をもつ本文に打つのも、それは一つの〈読み〉の提示である。私達は注釈書の本文ですら、既に注釈が施された上で成っていることを忘れてはならない。

これまで中納言の母一人として見なされてきたこの部分は、それなりに大きな「浜松」理解を生んできた。それは「大将の大殿」という人物と中納言の母とのつながりに関わる〈読み〉である。ここは、おそらく高齢であろう「大将の大殿」が病に臥したため「大将殿の上」が見舞いに参上し、「衛門の督」はその邸に宿直するという場面である。「衛門の督」は巻三「二五」に「大将の大殿の衛門の督」（六四五）とある一文から「大将の大殿」の子供であることがわかる。だから宿直するのである。では、「大将の大殿」の見舞いに中納言の母が参上するということは、どのような〈読み〉を生じさせたのか。それは中納言母が「大将の大殿」の子供であるという〈読み〉である。この部分の〈読み〉によって「大将の大殿」一族の系図は形成されている。そのため、この

部分を大将と中納言の母としてしまうことは、「大将の大殿」家の系図に対して疑問を抱かざるをえなくなる。「大系」が補注で指摘し、「久下」が見解を示しながらも読点を本文に打たなかったのは、本書が注で前提として述べる「中納言の母にとつて「大将のおほいと」は父」という解釈自体に揺れが生じてしまうからではあるまいか。

これら述べさせていただいた問題は、「浜松」の系図がまだまだ不確かなものであるという（目を背けていた）事実に変更して直面させられるものである。これがまさに「浜松」という物語の不幸にして幸いな注釈・研究状況を表している一つの例であろう。「不幸」なのは、再三述べてきたように、「わからない」部分がたくさんあるから。「幸い」なのは、「不幸」な状態にあるがゆえに、これから多くの〈読み〉が提示されるのを待っている物語だからである。

最後にもう一つ。巻三「二五」の「帥の宮」の注（六五一頁）。本書は「吉野尼君の在俗中に通つてきた帥の宮とは別人」とする。その理由として、著者は「こちらの「帥の宮」と吉野尼君の（二）との「カ」間にできた吉野姫君が十四歳になっていることから、少なくとも十五年以上も前の官職を人名とすることはあるまい」と注を付している。これまで吉野姫君の異父妹とされてきた、衛門の督の北の方へのあらたな〈読み〉である。確かに「十五年以上も前の官職を人名とすることはあるまい」という著者の説には一理ある。これが普通の論理ではあろう。ただ、この「帥の宮別

人説」を一つの〈読み〉とした際、巻五「二六」の「中納言、大式女の所からの帰途、衛門の督の元の北の方邸を覗き見て同情する」(二二三頁)を、『伊勢物語』四一段を重ねて〈読む〉ことができない。この場面では著者も注釈のここかしこに「彼女は帥の宮の御娘であるので」「吉野姫と同じ帥の宮の娘」「二人は異母姉妹」と〈読み〉を加えており、巻三「二五」の「帥の宮」の注との整合性がとれない。普通の論理を当然のごとく物語内論理として当てはめて考えるのは、慎重に慎重を期さなくてはならないだろう。まだいくつかの意見はあるものの、これ以上の妄言は慎ませていただきたい。

これだけくどくどと述べた上で今更だが、私には優れた注釈書というものがあるのかどうかからしない。ただ、注釈書というもの、その物語の解釈を決定させ、〈読み〉に決着を付けるものではないであろう。一義的な〈答え〉を提示する注釈書から生まれるものは何もない。自らの内に、ふつふつとわき起こる〈読み〉を生じせしめるようなものが優れた注釈書だとすると、本書はまさにその体をなしている。誠実に先行研究を検討し、いくつかの説を整理し、用例を綿密に調査して一つの説を後押しする。時には控えめに新説を述べながらも、これは一つの〈読み〉の提示に過ぎないのだとし、先行研究を侮らず忘れずに、新たな〈読み〉の発生を期待しているかのような注釈の付け方は、この注釈書を手取る者がある一定方向に導きつつも、〈読む〉という行為を促すものであろう。また、それと共に、自分自身で数多くの

用例に当たりなさい、実直にひたむきに物語と向き合いなさい、先行研究を侮る事なかれ、と優しく諭されているかのようで、それはお叱りを受けるよりも胸に響き、ただただ怠惰な私が恥ずかしくいたたまれない、という気持ちにさせるのが本書である(すくなくとも私はそうである)。

著者のまつすぐに物語と向き合う姿勢は、著者の論文と全く変わるどころなく、本書を手にとった私へとひしひしと伝わってくる。一度もお会いしたこともないのに、「書評」と称して私情を述べさせていただいた上、著者の人となりを〈読む〉という行為をさせていただいた(それは当然、〈答え〉・動くことのない事実ではない)。お会いしたことがないということが、本書から著者の研究に対する情熱、誠実かつ実直な研究姿勢をより強く感じさせるものであったと考えつつ、『浜松』愛読者である(ではない)私個人の妄言と思える意見を述べさせていただいた、この無礼を深くお詫びさせていただきます。

(和泉書院 二〇〇五年二月二八日 一三八七頁)

本体価格二八、〇〇〇円  
(やしま・ゆか 駒澤大学非常勤講師)